

Title	神聖羅馬帝國(占部百太郎譯, 國民圖書株式會社發行)
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.157- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は主として宗教觀、倫理觀の有無を、外的には社會組織と經濟狀態に關することを中心として説述せられ、次いで俗習や流行に關して民謡に據る史的考察をなし、種々の例を引用して、仲々面白く記述せられて居る。(五) 結語に於て、現今は思想界の危機であると同様に、日本音樂に取りても大危機であるので、大正の新民謡の未だ多く産出せられない此の時に於て、其の氣勢を醗酵するに與つて力ある各人に對して、切に一考を希望せられて擱筆して居る。

さて民謡の蒐集研究或は創作の流行する秋に當り、我が國の民謡に史的考察を試みたる本書の公にせられたことは、誠に敬賀すべきであると共に、民謡に興味を持つ人々に一讀を勤める。

(大正十三、十二、十三 武田勝藏)

神聖羅馬帝國(占部百太郎譯) (國民圖書株式會社發行)

本書は今茲に更めて紹介するまでもなく、汎く世人の知れるジエームス・プライヌ郷の一大傑作にして、世界の名著の一つとして、尊重され、且愛讀されてゐるものである。従つてその内容及び價値に就いては事新しく云々するまでもなからうと思ふが、譯本は又別個の意味を有するものであるから、簡単に茲に紹介しよう。

本書は増補を合せて、二十五章より成るもので、今その目次を一覽するに、第一章序論、第二章蠻族侵入前の羅馬帝國、第三章蠻族の侵入、第四章西歐に於ける羅馬帝國の復古、第五章チャト

ルスの帝國及び政策、第六章カルロス王系と伊太利の諸帝、第七章、中世帝國に就いての理論、第八章羅馬帝國と獨逸王國、第九章サクソニア系及びフランコニア系皇帝、第十章帝國と法王廳との競争、第十一章伊太利に於ける諸皇帝——フレデリキ赤鬚帝、第十二章帝國の稱號及び假託、第十三章ホーエンスタウフェン系の没落——更新したる法王廳對帝國の争訖、第十四章獨逸憲法——七選舉候、第十五章國際的權力としての羅馬帝國、第十六章中世紀に於ける羅馬市、第十七章東羅馬帝國、第十八章文藝復興、羅馬帝國の性質に於ける變化、第十九章宗教改革と其の帝國に及ぼしたる影響、第二十章ウエストフアリア平和條約、帝國衰微の最後の行程、第二十一章羅馬帝國の滅亡、第二十二章提要及び回想、増補、第二十三章國民的統一に向ふ獨逸の進歩、第二十四章新獨逸帝國、第二十五章結論。

本書の特色とする所は何人も認めらるゝ通り、正々堂々たる史論と、飽くまでも首尾一貫したる叙事の鮮明であることである。著者は五世紀から十二世紀に至る基督教國の歴史、十二世紀から十九世紀に至る獨逸及び伊太利の廣範なる歴史を書くに當つて、羅馬帝國が依つて立つた思想及び信仰の總體を説述する方法に依つて、散漫徒勞になりやすい叙事歴史の一般の弊を救つて此に内面的統一をあらしむると同時に、他方に於て、歴史家の到底看過する能はざる大いなる歴史的事件例へば、チャールスの戴冠さか、南歐と北歐の合同運動さか、いふ興味中心の問題に着眼すると共に、此等の事件に關係したる歴史的人物の行爲及び性格とい

ふものに絶えず注意し冷冽なる觀察と鋭利なる批評眼を拂つてゐる。此の點に於て先づ吾等は第一に著者の歴史家又は評論家としての尋常ならざる天賦の力に強く印象せしめらるゝ同じく、その學識の豊富にして見識の高きに畏敬せざるを得ないのである。

次で本書の趣意とする所を窺ふに、著者はその序論に於て『此の論文の重なる趣意は近代文明に於ける羅馬チユートン兩要素の融合の最も著るしい例として帝國の内面的性質を一層細述することゝ委しく言へば、奈何にして此の如き結合が可能であつたか、奈何にしてチヤールス及びオットーが西歐に於て帝國の名稱を復活するに至つたか、奈何にして彼等の後繼者の治世を通じて帝國がその起原の記憶を保存し、而して歐洲の諸國家に影響を與へたかといふことを示すに在る。』と言つてゐる通り、本書の主眼は自ら明瞭であらうと思ふ。

羅馬は北歐蠻族の侵入に依つてさしも大なる往年のその權力と文明とは一時衰微せざるを得なかつたが、然しその燦爛たる精神文化の傳統の感化力は一時に消失するやうな薄弱なものでなかつたことは無論である。羅馬人の築きあげたる文明と權力とは餘りに永續的で且餘りに世界的であつた。羅馬は蠻人の侵入に依つて人間の肉體上に於ける權力を失つたが、その文明と權力とは其後久しく西歐羅巴人の精神を支配するに至つた。かゝる南歐文化の傳統が偶チヤールス或はオットーの如き非凡なる大天才の出現に依つて北歐に復活する、機縁を生じたといふことは、偶然のことでない。羅馬人チユートン人の合同に依つて近代の歴史が

展開したのであつて、此處に吾等は世界歴史の意義を讀むことが出来ると思ふ。蓋し共通なる文化に向ふ國民の統一化といふものが羅馬の遺した世界支那及び世界宗教の二大觀念の中に強く現はれてゐるが故である。國民のこの統一化といふものが即ち人類全體の歴史である。而して此の文化統一化の世界史的運動は、傳統の力に依つて新なる國民が覺醒することに依つて行はれたのである。いふまでもなく羅馬帝國の北歐に於ける復活は單なる古代文化の復活ではない。換言すればそれは傳統を受け入れ此を飽和することに依つてそれ自身の創造的活動を展開したのであつて、此處に新時代即ち獨逸帝國が生れたのである。吾等は今日の西歐羅巴の文化を以つて地中海文化が從來大西洋文化の中へ入り來つたものであると一般に考へてゐる如く、吾等は現今の運動に於て更に普遍的なる全地球を包括する國民の共同生活に向ひつゝある進歩を豫感せざるを得ないのである。

要するに本書は一面に於て羅馬及び獨逸の文化史とも目されるべきものであると同時に、現今の世界史的運動を更に鮮明にすべき有力なる鍵である。かゝる意味に於て本書の如き有益なる書籍を吾が學界に紹介されたる譯者に對し滿腔の感謝と敬意を表する次第である。

(一九二四年十二月三十一日稿 山本光郎)

英國經濟組織(高木壽一譯) 中外文化協會發行

本書はウィリヤム・ゼームス・アシユレー教授がハンブルグ植民學會に屬する一般講座の一部として一九一二年クリスマス前の